

D. 考 察

日母調査における先天異常児の発生状況は1998年度のモニタリング集計分析からも例年の結果に比し多少増加傾向を示したが、1997年より新たに心奇形マーカーを調査項目に加えたこともあったため、これらの心臓の先天異常の報告が従来に比し増加し、結果として全体の奇形率の若干の増加となったものと思われる。しかしながら、これらの変動が調査手法の変更による人為的なものか、真の増加か、を十分慎重に見極める必要があり、さらに監視体制を整え追跡する必要があると考えられた。

一方水頭症等の一部の先天異常は日本母性保護産婦人科医会調査において増加傾向がみられているが、超音波診断法の進歩によるものと推定される。さらに、尿道下裂についてはいわゆる環境ホルモンとの関連性が話題となっているが日本母性保護産婦人科医会先天異常モニタリングでもここ2-3年の増加傾向がみられており、今後慎重な調査・監視体制（先天異常以上モニタリング体制）の維持が必要と考えられた。その一環として、今回検討された妊娠初期女性の内分泌攪乱化学物質（いわゆる環境ホルモン）の測定ならびにその解析は決して短期的には結論は求められない性格の研究といえるがきわめて重要と考察された。

いずれにせよ、現代の環境をとりまく多種多様な因子はいつどのような形で催奇形因子として影響を与えることになるか常に万全の監視体制を整えることが重要である。過去にサリドマイドという薬害の悲劇を味わった我々には先天異常モニタリング、さらにはサーベイランスは極めて重要なことであり、今後も厳重な監視を行うこととしたい。

E. 結 論

先天異常サーベイランスによる調査手法を用いて本邦における先天異常の実態有無を調べたところ、1998年1月1日より、1998年12月31日までに出産した外表奇形等調査結果から先天異常児は、出産児総数96,303児のうち1449児(1.50%)であった。また妊娠中に診断される先天異常症例が増加しており、1998年度の症例においては全1,449児のうち、556児(38.4%)が出生前に判断されている。各外表奇形の内訳等については、心室中隔欠損が最も多く、ついで口唇・口蓋裂、ダウン症、水頭症、などであった。また、その背景因子として各種内分泌攪乱化学物質（いわゆる環境ホルモン）との関連性を調べる研究調査計画を作成した。

F. 研究発表

平原史樹、住吉好雄、田中政信、朝倉啓文、水口弘司、

先天異常モニタリング、産婦治療、74: 466-472、1997

住吉好雄、平原史樹、水口弘司、田中政信、先天異常モニタリング、

産婦治療、75: 87-94、1997

平原史樹 神経管奇形の発生と動向 こども医療センター医学誌

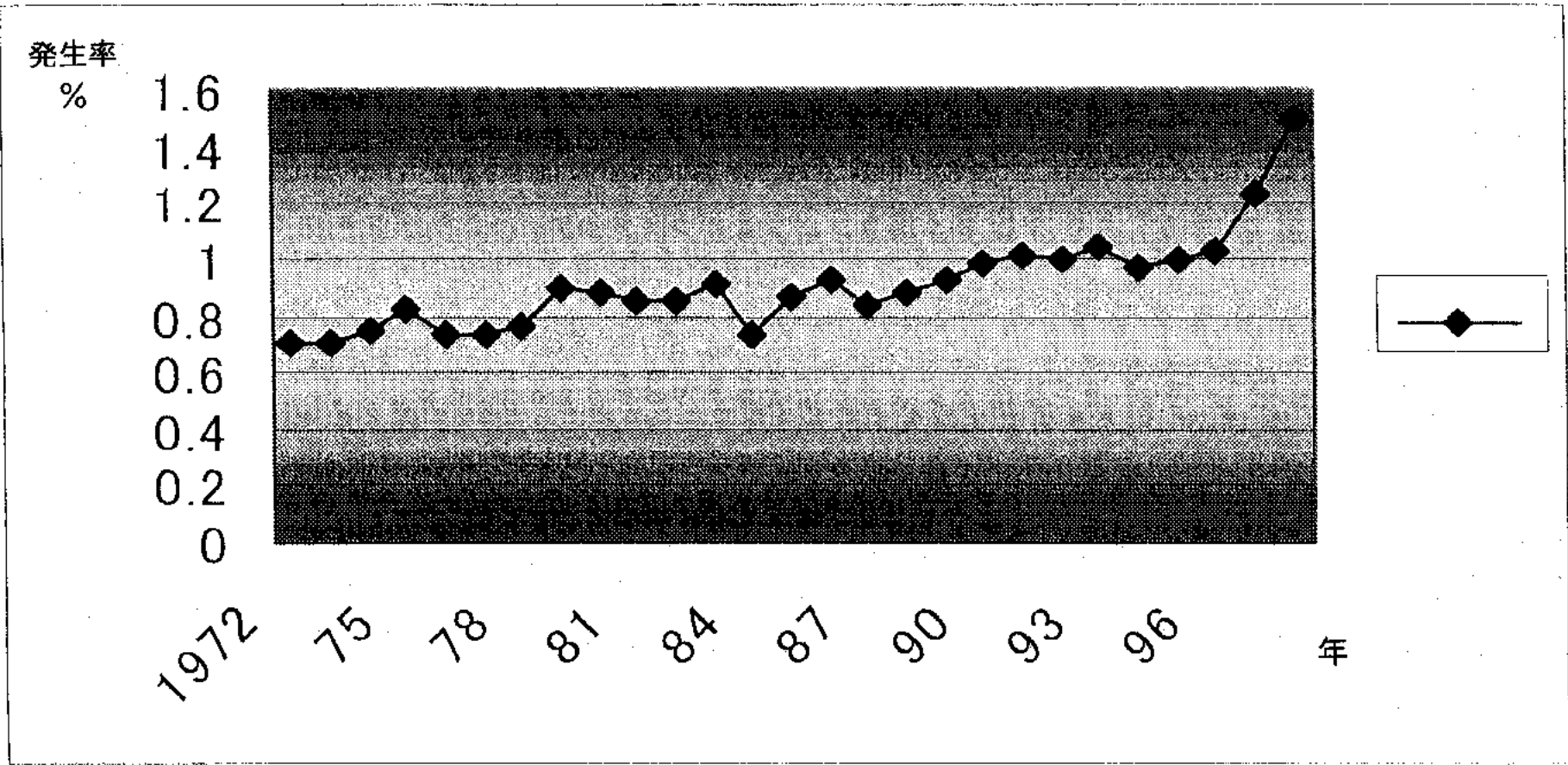
28: 193-196, 1999

平原史樹、住吉好雄、鈴木恵子、松本博子、山中美智子、田中政信、

本多洋、坂元正一、本邦における先天異常発生の状況と

その推移 日本児薬理学会誌 12: 64-66, 1999

Incidence of congenital anomalies



Hydrocephalus

-6-

